

鷗外の奈良

辻 憲男（文学部教授）

大正7年（1918）11月9日、土曜日、曇。正倉院開扉、参観者一人。昼に雨になり、閉扉。宿舎に帰って着替え、電車で西大寺まで。昔の堂宇ではない。雨中歩いて平城宮大極殿跡を訪ねる。道が絶え、あぜ道を踏んで進む。宮跡は田より一尺ばかり高い。荒草に足が没する。県の立てた木の標のみ。行きつ戻りつ、野の花を摘んで帰る。法華寺の前、ひさしの下で小さな女の子らが雨宿りをしていた。しばし立ち止まって、格子窓の内に尼僧の誦経（ずきょう）の声を聞く。日暮れて帰り着く（森鷗外の日記、原漢文）。

文豪は軍医総監を辞したあと、帝室博物館総長に任命された。年に一度奈良へ出張し、正倉院宝物の曝涼（ばくりょう）に立ち会った。近年の正倉院展と違って、観覧者は多い日でも百人に満たない。雨が降ると退勤し、一人で寺や史跡を見てまわった。この年は一ヵ月間に、西ノ京、郡山、法隆寺、柿本神社、飛鳥、京都へも足をのぼした。ふだんは一日一〜二行の日記なのに、奈良滞在中はくわしく、しめやかに物寂しい。しかしこれが体にこたえたのか、帰京後病臥し、年末の半月を欠勤した。最晩年の「奈良五十首」の中に、

晴る日はみ倉守るわれ傘さして巡りてぞ見る雨の寺寺

黄金の像は眩（まばゆ）し古寺は外（と）に立ちてこそ見るべかりけれの作がある。心に染みたのは仏像や建築ではなく、古色の町のたたずまいであった。優しいロマンティシズムと、孤独な反俗。明治人らしい潔さがある。



博物館前に建つ宿舎跡「鷗外の門」。妻への手紙の中に押し花、娘・杏奴にあてて「アヌヌにとらせたい／正倉院の中のゲンゲ」。